

母校とわたし

昭和学院高校 ▼▼③

ハンドボール一筋の高校時代だった。

インターハイ、国体と全国大会出場は当たり前の環境の中、朝7時からの「朝練」と放課後の練習。土、日も休みはなく、修学旅行にも行けなかった。練習が野外だったため、いつも真っ黒に日焼けしていた。双子の姉妹、高柳もとえさんと中田(旧姓・高柳)ふくえさんは「あのころがあったから、今の私がある」と口をそろえ青春の日々を振り返る。

姉のもとえさんは現在、

父設立の病院
医師と事務長

部活で培った精神力

高柳もとえさん(38)
中田ふくえさん(38)

高校時代は勉強してないの
で、これから勉強する」と
奮起。3年後、25歳で帝京
大医学部に入學した。

「ハンドボール部の経験
から、『もうだめだ』と思
ってから頑張れる力が身に
ついてた。気力と体力、
精神力があったからこそ実
現できた」

学部6年、研修医2年を
経て同大学院へ。99年に74
歳の父を大腸がんで亡くし
たことから、消化器内科で
研究しようと考えた。昨年
から聖路加国際病院に勤
務。平日は東京、土曜日は
市川という多忙な日々を
めた。そうやることで、職

「充実した毎日です」と話
す。将来は高柳病院に帰っ
てくるつもりだ。

ふくえさんは民間企業で
2年間のOL生活を経て、
管理栄養士として高柳病院
に勤務。99年からは事務長
を務める。父を亡くして若
くして就いた要職。立場が
変わり、「病院の切り盛り
は大変だった」という。
トイレの掃除など他の職
員と同じことから仕事を始
めた。そうやることで、職



医師の姉・高柳もとえさん
(右)と事務長を務める妹・中
田ふくえさんの双子姉妹＝市
川市南八幡4の高柳病院前で

員たちが自分の言うことを
聞いてくれるようになった。
「開業医の娘に生まれ、
大事にされお嬢様育ちだっ
た。ハンドボールをやった
時の根性がなかったら、
こんなふうには出来なかつ
たかも」と笑顔をみせる。

小さなころからいつも一
緒だった。「責任感があつ
て尊敬できる。将来、姉が
帰ってくるのは心強い」と
ふくえさん。もとえさんは
妹を「頼れる存在。言いに
くいこともきちんとやって
くれるし」と評する。厳し
かった高校のハンドボール
部生活も「互いの支えがあ
ったからこそ頑張れた」と
いうかけがいのない存在
だ。これからも変わらない。
信頼し合う2人。将来は、
がん患者の緩和ケアなど
に力を注ぐ病院をつくりたい
という。父の遺した病院で、
双子姉妹の二人三脚は続
く。

【神足俊輔】

「知らない世代」母親らの団体



施設

八街市八街の知的障害
者授産施設「明朗塾」で
1日、「第7回明朗塾夏
祭り」が開かれ、200